

『たらい舟も楽じゃない！』

夕闇が迫る小木港の入り江は、鏡のように穏やかだった。

初秋の風は、日中の湿り気を帯びた熱をさらっていく代わりに、少しばかりひんやりとした寂しさを運んでくる。

空には赤とんぼが、まるで夕焼けの破片が舞っているかのように無数に飛び交っていた。

「お疲れさん、あたしは今日これで最終だよ」

ベテランの船頭が、使い古された櫂を陸に上げた。

「あー、腰が痛い」

私だって、この佐渡ヶ島でたらい舟を何年もやっているけど、一日に何往復も客を乗せる舟の運行は堪える。観光客を乗せて揺られるのは、見た目以上に重労働なのだ。

最終船が出て、さて片付けを始めようかというその時、棧橋の向こうからドタドタと慌ただしい足音が聞こえてきた。

「すみません！ まだ、まだ乗れますか！」

やってきたのは、首から立派な一眼レフを提げた、小太りで小柄な高年男性だった。額には薄っすらと汗をかき、必死の形相である。

「悪いけど、もう最終は出ちまったよ」

「そこをなんとか！ 明日の朝には島を発つんです。どうしても今日、たらい舟に乗っておきたいんだ」

私は内心、溜息をついた。これだから都会もんは困る。こっちは朝からぶっ通しで働いてるんだ。それはこの場の船頭も皆同じで、誰もが口を開かなかった。

男が諦めるのを待っていると、背後から鈴を転がすような、それでいてどこか頼りない声が響いた。

「.....出しましょうか。せっかく来てもらったんだし」

声の主は、今年の春に船頭になったばかりの若い娘だった。まだ二十歳そこそこだろうか。藍色の紺の着物に赤い腰巻、頭には編笠という伝統的な姿は板についてきたが、その顔にはいつも、何を考えているのかわからない薄ら笑いが張り付いている。

「あんたねえ、もう片付けの時間だよ」

「で、でも私、まだ体力残ってますから」

娘はそう言うと、手際よくたらい舟を水面に引き寄せた。

私は渋々ついていくことにした。たらい舟は安全のために複数人で運行することもある。この頼りない新人に、欲かいた客を任せきりにするわけにもいかない。

こうして、私たちは出港することになった。

ゆらり、と大きな桶が海に浮かぶ。

男は、運よく乗れた安堵感と、目の前の「伝統文化」そのものの光景に興奮を隠せない様子だった。

「いやあ、素晴らしい！ この緋の着物に編笠、これぞ佐渡の情緒だ。写真で見るよりずっと風情がある」

男は鼻を膨らませて一眼レフを構え、やたらと饒舌になった。

「たらい舟の歴史は、明治時代、地震で地盤が隆起して地形が複雑になった。それで、この狭い岩礁や入り江でアワビやサザエを獲るために、この形が定着したんですよね。言わば、海辺の知恵の結晶だ。漁業用のたらいを作るとは、まさに画期的です」

（……違う！ 江戸時代からさ。それに、最初から漁業用に作ったんじゃないよ！ 元々は洗濯桶で、それを改良したんだよ）

船頭の娘は、男の話を聞いても、櫂を漕ぎながら半笑いで否定もしない。半年もこの仕事をしてるくせに、何にも知らないのか。情けないったら、ありやしない。

男は話をさらに続ける。

「今でも『磯ねぎ漁』という古来の漁法が残っているんでしょう？ 伝統を守るのは大変だ。君のような若い子が後継者になってくれないとねえ」

男はいかにも「私は佐渡通ですよ」と言わんばかりの口調で、講釈を垂れ始めた。娘はまた半笑いで頭まで下げている。

私は心の中で毒づいた。

（あんたに言われなくたって、島の皆で考えてるさ！）

私は黙って海面を見つめ、漕いでいる櫂が立てる小さな波に揺られるたび、体のバランスを整える。男はなおも、若い船頭に詰め寄っている。

「どうだい、君。観光客を乗せるだけじゃなくて、本物の『磯ねぎ漁』を継ぐ気はないのかい？ 島の文化を絶やしちゃいけないよ」

若い娘は、鼻の下の長い男の熱弁を「へえ、そうなんですか」とでも言いたげな、あの薄ら笑いで受け流している。その姿が、私にはどうにも我慢ならなかった。伝統の重みも、漁の厳しさも知らないまま、ただ言われるがままに舟を漕いでいるだけ。この娘には、島の女としての気概というものが欠けている。

ひとしきり写真を撮り終えた男は、今度は妙な自信に満ちた顔で言った。

「私にも少し、漕がせてもらえませんか？ こう見えても昔はボートをやっていたよ。コツは掴んでいますよ」

男は、若い船頭から半ば奪い取るようにして櫂を掴んだ。

「まあ、やってみてください」

娘はあっさりと場所を譲った。

男は意気揚々と櫂を海に突き立て、力任せに回し始めた。しかし、たらい舟というやつは一筋縄ではいかない。左右にただ振るだけでは、舟はその場でくるくると回るだけだ。

「あれ？ おかしいな……。もっと、こう、ぐっと……」

男は顔を真っ赤にして格闘しているが、舟は一向に前へ進まず、メリーゴーランドのように回転を続ける。

私はそれを見て、鼻で笑った。当たり前だ。この道何十年の私でさえ、潮の流れと風を読みながら、体全体でバランスをとって初めて真っ直ぐ進めるのだ。付け焼き刃の知識や腕力でどうにかなる代物ではない。

（何がボートをやっていて、だよ。この、ほら吹きめ！）

思い通りにいかないことに苛立った男は、やがて不機嫌そうに、「……潮の流れが悪いな」と捨て台詞を吐き、放り投げるようにして櫂を娘に押し付けた。

娘は少し手を滑らせながらも、海に落とさずに櫂をキャッチした。そして、またあの、のっぺりとした薄ら笑いを浮かべている。

（何考えてんだ、この子は！）

私の怒りは頂点に達しそうだった。

櫂は、船頭の命だ。客を乗せている以上、その一本の木切れに全員の命がかかっている。それをあんな風に扱われて、ヘラヘラ笑っているなんて。船頭としてのプライドは無いのか。

その時、海面で「ピチャッ」と水が跳ねた。

男はすぐに反応し、しゃがみ込んでカメラを向けた。

「おっ、今のはメバルですね？ 結構いい型だ」

私はすかさず、それは――、と言いかけ、喉まで出かかった「クジメ」という言葉を飲み込んだ。代わりに、冷ややかな、しかし凜とした声が響いた。

「アイナメですね」

ぴしゃり、と言い放ったのは若い船頭の娘だった。

「……え？」

「アイナメです。メバルじゃありません」

男は一瞬、鳩が豆鉄砲を食ったような顔をした。

私は驚いて彼女の顔を見上げた。先ほどまでの頼りなさは消え、その瞳は夕闇の中でも鋭く獲物を捉える海女のように澄んでいた。

（……その通りだ、アイナメだ。よく分かったな、この娘）

海の中は、岩礁が複雑に入り組み、夕陽の光が届かない場所は深く、濃い影を落としている。幻想的な斑点模様を描くその海域を、舟はゆっくりと進む。

男は動揺を隠すように、遠くに見える島を指差した。

「ああ、あれが矢島で、こっちが経島ですね。赤い太鼓橋が映えるなあ」

「逆です」

娘は容赦なく訂正した。

「あっちが矢島。こっちが経島。それから……」

男はたじろぎ、さらに取り繕うように言った。

「あ、ああ、そうだった。失礼。ところで、ここから『青の洞窟』には行けるんですか？ ぜひ見てみたいんだが」

「ここらでは『琴浦洞窟』か『竜王洞』と呼びます。それに、たらい舟ではそこまで行けません。波が高くなりますから。今日はもう戻ります」

毅然とした態度。それは、客に媚びる観光業の顔ではなく、海を知り、海を畏れる「船頭」の顔だった。

男は完全に気圧され、先ほどまでの饒舌さが嘘のように黙り込んでしまった。

（ふん……。まだまだ半人前のくせに、気に食わねえが、間違っちゃいねえ）

若い船頭の娘は、櫂を懸命に動かしていた。顔からは、あの薄ら笑いが消えている。

帰路、男は一言も発さず、一人で黙々と写真を撮っていた。

夕日が沖に沈おうとしており、透き通った海は燃えるような茜色に染まっている。娘が漕ぐ櫂の動きに合わせて、私たちの長い影が水面に揺れていた。

私はその光景を見ながら、不意に古い記憶を思い出していた。

（『磯ねぎ漁』ねえ……）

昔、まだ若かった頃は、私も『磯ねぎ漁』に駆り出されたものさ。

船頭は片手で櫂を操りながら、もう一方の手で箱メガネをのぞいて、海の底や岩の陰を鋭い眼差しで獲物を探す。サザエならヤスで挟んで獲り、鮑ならカギで引っぺがす。タコがいるときもあるから、それもヤスで突いて仕留める。上手い人は、アイナメなんかも一発さ。

今もたらい舟が、島の生活を支えているのは変わらないが、あの頃は食い繋ぐためのもので、今みたいな気楽なものじゃなかった。船頭は皆、海を睨み、誇り高く舟を操っていた。

（そろそろ、船着場か）

私達はどんぶらこ、どんぶらこと、ゆっくりと船着場へと近づいていく。

「着きましたよ」

娘の張りのある声が響いた。行きの貧弱な声とはえらい違いだ。

舟が着くやいなや、男は逃げるように舟を降りようとした。プライドを傷つけられた恥ずかしさから、一刻も早くこの場を去りたかったのだろう。

しかし、焦りは禁物だ。

「あ、危な——」

ドスン。

鈍い音が響いた。栈橋に飛び移ろうとした男が足を滑らせ、尻餅をついたのだ。

「大丈夫ですか！」

「お怪我はないですか、立てますか？」

頭の上で、若い娘の慌てた声や、他の職員が駆け寄る気配がする。

だが、私にはその様子を見ることはできない。

なぜなら、私はまだ海の上に残されている。男と若い船頭が私から降りて、軽くなった体の中に、涼しい海風が吹き込んだ。

（やれやれだっちゃ.....）

私は心の中で、いつもの口癖を呟いた。だけど、男にバチが当たって、少しだけすっきりしている。

潮の香りが、夜の匂いに変わっていく。船頭たちの足音が遠ざかり、入り江に静寂が戻ってきた。

「よっこらしょ」

さっきの娘が、私を陸へ上げた。裏返して底にホースで水をかける。後片付けまでしっかりするのは当然だ。

娘は私を浜へ運んで行く。他のたらい舟と一緒に並べて、そのまま帰って行った。

あの娘が、もう少しマシな船頭になるを見届けるまでは、私はまだ引退するわけにはいかない。

それにしても、まだ秋なのに濡れた身に夜風が染みるっちゃ。

（了）